令和３年度　東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

令和３年 12 月　第９号

校長　阿久津　光生
〒114-0004
東京都北区堀船 2-23-20
Tel 03-3911-8817

北区教育ビジョン 2020 の人間尊重の精神を基調とし、
心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標　**自ら学び　自ら考え　自ら行動できる生徒**

＜令和３年度　第 71 回北区中学校連合音楽会が開催されました＞

令和３年度第 71 回北区中学校連合音楽会が開催され、吹奏楽部が参加しました。トップバッターだったため、開会式の後すぐの演奏となりました。

11 人という少ない人数にもかかわらず、堀船中吹奏楽部は、綺麗な音色と迫力のある演奏を披露してくれました。私も聴いていて、とても感動しました。他校の先生方も、堀船中の演奏に加えて、あいさつや礼儀正しさについても大変褒めてくれていました。コロナ禍において、吹奏楽部は全員が一つの場所に集まって演奏するような機会をほとんど持てませんでした。しかし、どんな状況下でも決して負けず、自分たちの思い描く最高の演奏を目指して積み重ねてきた努力が、この日ついに実を結びました。多くの人々を感動させる、とても素晴らしい演奏でした。

＜３組　合同校外学習に行ってきました＞

11 月 19 日（金）、３組は江戸東京博物館・東京スカイツリーに合同校外学習に行ってきました。浮間中学校と同じバスに乗って出かけました。天気も良くて、絶好の校外学習日和となりました。すべての行動が 10 分前行動で、挨拶や見学態度もとても立派でした。思い出に残る楽しい校外学習になりました。

＜繋げようほりふな祭　感動と喜びのある行事となりました＞

11 月 17 日（水）、生徒会主催で「繋げようほりふな祭」が行われました。新旧生徒会役員のみなさんが、生徒達の自治活動をまとめあげて、見事に成し遂げてくれました。舞台発表は、（1）吹奏楽（2）英語スピーチ（3）３組（4）合唱発表で、いずれの発表も大変素晴らしく、感動と喜びの溢れる行事となりました。

なお、「繋げようほりふな祭」の様子は、収録したものを編集して、19 日（金）の夕方、保護者の皆様宛に You Tube にて配信いたしました。来年こそは、今の１、２年生・３組の生徒が、保護者の皆様はもちろん、３年生を「卒業生」として迎えて、盛大なほりふな祭を行っていることを祈念しています。

＜受賞おめでとうございます＞

- 「薬物乱用防止ポスターの部」　地区会長賞　１年　木村（綺）さん
- 中学生の「税についての作文」　優秀賞　２年生　石井さん「東京五輪から考える税」
  佳作　２年生　奥平さん「支え合いに大切な物」
- 全国中学生人権作文コンテスト東京都大会　作文委員会賞　３年　田村くん　「従妹」
- 北区文化芸術祭俳句大会　北区俳句連盟賞　３年　吉野さん「ぐしゃぐしゃな『夏を制する』計画表」
  連盟奨励賞　３年　姫野くん「夏季休暇仏頂面の単語帳」
  ３年　染谷くん「夏休み母とぼくとの戦争だ」
  １年　境さん　「ヒマワリの目線はいつも空の向こう」

国際交流への尽力

昭和に入り、日米関係が悪化してきたことに心を痛めていた栄一に、「人形による国際交流で日米友好を図りたい」という依頼がアメリカから届きました。栄一は外務省などと連携して、「日本国際児童親善会」を組織し、アメリカ側から 12,739 体の「青い目の人形」を受け入れました。この人形は、全国各地の小学校に送られ、大歓迎を受けました。のちに、返礼として 58 体の日本人形がアメリカに送られています。

現在、「青い目の人形」は、埼玉県内の小学校などに 12 体（全国で 270 体余）保存されています。また、栄一は、第 18 代アメリカ大統領グラント、救世軍ウィリアム・ブース、中国の政治指導者孫文など、世界の著名人とも親交がありました。

アメリカから贈られた「青い目の人形」を手にする栄一【渋沢史料館所蔵】

【栄一が過ごした飛鳥山】

1877（明治 10）年、栄一は飛鳥山に 4,000 坪の土地を購入すると、清水組（現・清水建設株式会社）に敷地造成や母屋および付属家の建築を依頼して、1879（明治 12）年に飛鳥山邸が完成します。

それまでに栄一は何度か住まいを変えていました。1873（明治 6）年の時には、第一国立銀行を設立し、兜町の行内に住んで仕事に没頭しました。1876（明治 9）年には、第一国立銀行を設計した清水組の 2 代目・喜助に設計施工を依頼し、深川福住町に居を構えています。飛鳥山での土地購入が深川福住町邸の新築と 1 年しか違わないのは、栄一は当初、飛鳥山邸を別荘（接客接待の場）として考えていたからです。敷地内には、日本館と物置などの付属家、門、塀、庭園などが整備されていました。

そんな栄一は、明治 21（1888）年に兜町に洋風家屋を新築し、再び移り住みます。川岸に面しており、イタリアのベニスをイメージした煉瓦造り二階建ての豪華な建物でした。この建築物は、のちに栄一が飛鳥山に本邸を移したあと、渋沢事務所として使用されています。

曖依村荘内インドの詩人タゴールと栄一【渋沢史料館所蔵】

1901（明治 34）年に栄一は兜町を離れ、以降 30 年、没するまで飛鳥山邸を本邸とします。大規模な増改築を経て、最終的には 8,470 坪余り。増築された日本館に加え、西洋館、茶室「無心庵」、土蔵、倉庫、車庫等を設けたこの広大な邸宅は、「曖依村荘」と呼ばれ、内外の賓客を招くゲストハウスとして頻繁に使用されました。欧米ではゲストを私邸に招く習わしがありますが、当時の日本にそのような場所は少なかったのです。第 18 代アメリカ大統領を務めたグラントをはじめ、アジア人初のノーベル文学賞受賞者であるインドの詩人タゴール、中華民国総統蒋介石、救世軍大将ブラムウェル・ブース、フランスの銀行家アルベール・カーン等、政財界人、学者、文化人まで、飛鳥山を訪れた著名人を挙げればきりがありません。国内でも、政治家、実業家、文化人の招待はもとより、重要な会議の場として、あるいは地域住民との親睦を深めるための園遊会会場としても使用されました。栄一はこの私邸で、毎朝様々な来訪者に会っていました。世界中から来訪者を歓待し、生涯をかけて友好親善に尽くしました。飛鳥山邸は、民間外交に大きな役割を果たした舞台でもあったのです。

晩香廬は、現在深谷市に移築された誠之堂と同じく、喜寿のお祝いとして清水組が栄一に贈った建物です。来賓をもてなすため、栄一が好んで使ったと伝わります。また、八十歳の誕生日と、男爵から子爵への昇格を祝い、竜門社が栄一に贈った鉄筋コンクリート造り平屋建ての建物は、青淵文庫と呼ばれています。ステンドグラスやタイル等の美しい装飾が施されています。誠之堂、晩香廬、青淵文庫は、それぞれ異なる建築方法を用いた田辺の傑作であり、この三棟が飛鳥山旧渋沢邸と栄一生誕の地の深谷に保存されていることは大変意義深いことです。

晩香廬【渋沢史料館所蔵】

青淵文庫【渋沢史料館所蔵】